
敗者の勝点

百合茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

敗者の勝点

【Nコード】

N8557A

【作者名】

百合茶

【あらすじ】

「恋も部活も負けた。俺は『敗者』だ。そんな時言われた。「敗者のメリット教えてあげる。」って…

俺とテルは昔から仲が良かった。小学生の頃から二人してサッカー部に入り、中学では2年間同じクラスだ。おまけに去年テルが同じアパートの2階に引越してきた。お互い物凄く縁があって、『運命』ってヤツに引き寄せられているんじゃないか？とさえ思う。

——そんなある日

朝のミーティングの時間。先生の前で弧を描く3年生達の後ろで、俺とテルはこそこそ喋っていた。

「テル、マネージャーの谷口さん、辞めたらしいぜ。」

「ああ。やっぱり坂下先輩目当てだったんだな。」

「俺なら一発OKだけどなあ。：谷口さん、けっこう良かったのに。」

「あっちゃん面食いだな。俺はそう言うの、あんまり…。」

「なんだよ、それ。」

他にも何か言いたかったが、周りのざわめきが引いてきたのに気が付き、そこで会話を止めた。

「スタメン発表するぞ。」

先生が皆を見回して、ひと呼吸おいてから名前を読み上げる。

「ツートップは坂下と加藤…」

——さすが坂下先輩、そりゃモテるよなあ。

心の中で呟く。

——目の前に気になっていた人がいたのに、谷口さんは坂下さんしか見えてなくて、坂下さんは…？　ってちょっと待て！俺が…気になっていた！？　好みの一例としてではなくて、『谷口里美さん』が気になっていた！？

はあ…。

スタメン発表時に、ため息ついてがっくり頭を垂れている俺は、生意気な後輩に映るだろう。

——そんな事より、目の前から消えてしまった後で自分の気持ちが分かる……。こういうのを何と言うのだろう？ 谷口さんの気持ちがかつて『失恋』とすべきか、坂下さんがフットくれて『ファイト』を燃やすべきか……？

俺が独りで葛藤している間に、スタメン発表から控えメンバーの発表に移っていた。まあ、よほど上手くない限り、2年が登録メンバーなんて入りっこないんだけど。

が、しかし……

「……森口、佐川、平中もだ。」

——うそ？

隣のテルと顔を見合わせる。

「テル、俺たち！」

「やったぜ！ あっちゃん！」

先生がまだ喋っているのもお構いなしに、ガッツポーズやらVサインやらをキメまくる。

——谷口さん！ やりました！ 俺、森口敦と、相方の平中輝光は……

「ああ、当たり前だが、”森口”は3年の”森口博人”の事だ。」

途端にどっと笑いが起き、俺は今度こそ本当にがっくり頭を垂れた。

テルだけは、相変わらず飛び跳ねていて、一緒に控え入りした佐川に親指を立てていた。

俺とテルは今まで、お互い物凄く縁があって、『運命』ってヤツに引き寄せられているんじゃないか？ とさえ思っていた。それがこのメンバー発表で、俺とテルを引き付けるのは『運命』から『宿命』に変わった。テルとは親友と同時に宿敵で、ずっと対等だったのにテルに離された。負けた。同じようにしてきた中で俺は今、『対等』

ではなく『敗者』の側にいる。

——なんで、俺だけ：

部活の合間の休憩時間。ドリブル勝負をしているテルを遠巻きに、芝生の緩やかな斜面に寝転がる。

——恋も部活も、俺は敗者：

「ねえ、生きてる？」

究極に気持ちちが沈んでいると、死顔に見えるらしい。天から声が降ってきた。

「なんか幻聴がする：神様が迎えに来たのかな？」

本当に救いの女神が来たような気分になり、それをそのまま冗談で返しながら、ひよいと体を起こした。クラスメイトの石井梨乃が隣に座っていた。

「あっちゃんが元気ないなんて、らしくないよ。」

「俺だって落ち込む時くらいあるさ。」

「じゃあ、仲間だね。」

「仲間？」

梨乃が瞬きと同時に頷く。彼女のまつげは濡れていて、恥じるようにグスツと鼻をすすった。

「あたしね、外されちゃった。女バレって人数少ないでしょ？だからって訳じゃないけど、あたしリベロで先輩達と試合してきたんだよ？なのに、5月に捻挫して戻ってきたらメンバー外されてさあ。

なんで先輩達との最後の大会、やらしてくれないんだらうって：。」

「そっか：。」

また泣き出しそうな梨乃の顔がまともに見れずに、そっけない返事を返した。

それ以上お互い何も言わず、暫く遠くを眺めていると、二人して同じものを見ている事に気付いた。

——テル。

凄く遠くに感じる。センターラインが勝敗を分けているような気

さえする。俺と梨乃は『敗者』、テルや坂下さんは『勝者』と言う風に。

「…え？あっちゃん今何ていったの？」

俺は無意識に何か口にしてたようだ。多分、さっきから頭の中で廻る、『敗者』の事だろう。俺は梨乃と似たような境遇と、敗者である事を話した。

「…俺、このままずっと負けるのかなあ。」

「そんな事ないよ。あっちゃん、敗者のメリット教えてあげる。」

梨乃は左肩にかけていたタオルで綺麗に顔を拭いて、にっこり笑った。

「負けていたらね、これ以上負けらんない。ってファイト湧くじゃん？それに、敗者は勝者になる事だってあるんだから。」

「いつか勝つという点…敗者の勝点か。」

頭の後ろで腕を組んで、またごろりと寝転ぶ。背中をチクチク刺すのは芝生。胸元の汗を乾かしてくれるのは風。空が急に陰ったのは…

「なっ!？」

梨乃の顔が近付いて、頭の下から手を引き出す前に、頬に接触する。微かにレモンライムの匂いがした。

「あっちゃん、あたしあっちゃんが…好き。」

梨乃はタオルをきつく握り締めながら、ゆっくり話す。

「でも、あっちゃんがマネージャーさんの事好きだ。って分かったやつだから…。」

最後に俺の目をしっかり捕え、小さく、でもはっきりとこう宣言した。

「今は敗者だけど、いつかあっちゃんがあたしを見てくれたら…それまで唇だけは奪わないでおいてあげる。…絶対負けないからね。」

休憩終了の合図とともに梨乃に手を振って、俺はテルの所へ駆け

出した。いつかそろってゴールがキメれるように…。

(後書き)

初のラブストーリー？

最後の『ゴール』は、梨乃（または谷口さん？）とのゴールインも、テルとゴール（シュート）をキメる事も、敗者から勝者になる（ゴールする）事も、いろいろの意味でのゴールです。

最後までありがとうございました。

尚、テルが主人公の『そのままの君で』も一ヶ月遅れで投稿しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8557a/>

敗者の勝点

2010年10月8日15時09分発行